



佐々木保行

京大乳幼児保育研究会編 「集団保育における乳  
幼児の発達研究——寺田ひろ子遺稿ならびに  
共同研究——」

さ・さ・ら書房 一九七九年 一三〇〇円

本書は心理学・保育学の分野で、基礎的研究を積み重ねていた寺田ひろ子氏の遺稿論文集である。寺田氏は三十一歳の若さで、短い生涯を終えたが、乳幼児の発達心理学・保育学の基礎資料の研究に、卒業論文以来、取り組み、鋭

い問題提起と研究着眼の新鮮さに、多方面から囑望されていた少壮気鋭な研究者であった。

ところで往々、諸論文の集積形態をとる書物は、読みずらく、断片的な興味しかそそらない場合が多い。しかし本書は、京大乳幼児保育研究会の研究者集団によって編集され、また各論文に解説が付されているため、寺田氏の問題意識や考察の軌跡が、明瞭に把握される。それ故、本書は読者をひきつけ、寺田氏と対話している状況へ誘い込む。

表題にあるように、本書は集団保育における発達の諸問題を、乳児期と幼児期前期（一歳〜三歳）の、三歳未満児

の研究に中心をおいて展開されている。この分野は、三歳以後の研究とくらべて格段に遅れ、研究の視点も稀薄な領域である。

寺田氏の発達研究の視点を、簡潔に要約するならば、乳幼児の発達をまるごととらえるということである。そのために、個人の系としてみた発達特徴と集団の系の中での発達特徴との相互関連性を重視し、乳幼児を活動の全過程の流れの中で、考察する必然性を指摘する。

発達の総合把握の研究の方向性を提起する寺田氏は、単に研究室の中からの提言だけでなく、否、保健所等のクリニックに携わる中で、仮説を検証し、たえず現場とのフィールドバックを行いつづけた。それだけに、彼女の指摘は、受けとめる側にとって重い響を与える。

「発達のとらえ方」の提言の一つとして、「相互関連性をもちながら発達している心性は少なくとも、身体発達の運動、手指の操作、認識の三つのレベルでとらえる必要がある」と強調する。

三歳以前の研究は、わが国の保育制度、行政などの立ち遅れと関連し、保育カリキュラム編成上の基礎資料の蓄積で、ことさら欠落している部分でもある。それ故、多様な

方法と多様な研究が駆使されつつある中で、本書は注目され、評価されねばならない、数少ない勝れた論文を含んでいる。

本書は、「乳幼児集団保育学入門」とも呼べる基礎文献に位置づけられる必読書である。

早川和男 「住宅貧乏物語」

岩波新書 一九七九年 三二〇円

私たちが家庭生活のあり方を考察する場合、欧米諸国に比し、住や居住環境の問題は、あまり重要な位置づけを付与されない。昨年、EC（欧州共同体委員会）は対日経済戦略基本文書の中で、「日本人はウサギ小屋に住む仕事中毒」と酷評したが、住宅貧乏の物的環境は、人格の形成・発達の問題と密接な関連をもつ。

「衣食足りて礼節を知る」「倉廩実ちて則ち礼節を知り、

衣食足りて則ち榮辱を知る”という、よく知られた格言がある。生活が豊かになると人は礼節を知り、道徳心が高まり、名誉を重んじ、恥辱にならぬようにつつしむといわれる。しかし、生活の豊かさを規定する内容に、住問題は欠落されている。

一般に住生活の悪化は、衣食の生活の悪化と比較し、その影響が直接的にあらわれにくく、人々の関心や行動の対象となりにくい。しかし住宅は、人間の意識や人格の形成に、はるかに大きな影響を与えつづける。

日本人は住宅のもつ重要性を、あまり理解しない傾向がある。それは住宅の貧しさが、直接的に影響をあらわしにくい、ということの他に、歴史的、文化的にも、「この世は仮の宿であり、起きて半畳、寝て一畳もあれば住まいはこと足りるといった仏教的諦観が、封建思想とともに生活全般を支配してきたことも事実」である。

著者も指摘するように、住宅政策を考える出発点としての認識は、住宅と人間の関係の解明を抜きにしては不可能である。本書はそれ故、住宅の貧しさが人間におよぼす影響を多面的に分析し、日本人の住生活の改善のため、多くの問題提起を行っている好著である。

大項目の目次は、I 過密居住の影響、II 弱い人々へのしわよせ、III 遠距離通勤と引越しの与える影響、IV 居住環境の悪化、V 家計を破壊する住居費、VI 住宅貧乏文化、から構成されている。

なかでも狭小過密住がおよぼす家族生活や子どもの生活への影響の大きさに、改めて驚かされる。子どもの健全な発達を願う教育・保育関係者にとってある面では教育・保育以前の問題ではあるが、過密居住の問題を考察することは、子どもの全体像を適切に把握する上で、必要不可欠な側面でもある。

ロンドン大学の森嶋通夫教授が、『イギリスと日本』（岩波新書）の中で、イギリスの中産階級の人々は衣食を切りつめても、十分な広さの家に住もうとすることを指摘している。それは、子どもたちに一人一部屋を与えることによって、独立心が培われるからだという。

個性豊かな人格と次の世代の性格を決定するといわれる住宅問題こそ、社会的・文化的・教育的な検討課題の一つである。

世良正利 「日本人のパーソナリティ」

紀伊国屋新書 一九六三年 四〇〇円

多くの日本人論・日本文化論がひしめく中で、本書もつユニークさは、文化とパーソナリティを研究する文化心理学の視点に立脚して、日本人の統一原理の解明に努めたことである。

国際交流が増々、隆盛になる今日、日本国民と同時に、国際人として行動できる人間を育成することは、教育や養育の重要な課題である。そのためにも、日本の文化・歴史の中で培われてきた日本人のパーソナリティを、よりよく理解する必要がある。その過程の中で、主体的行動を發揮できる人格を形成することは、とりもなおさず、日本人の精神構造の比較文化的観点からの分析と、歴史・社会的視点からの解明の上に、日本人像の展望が生まれるのである。

ところで世良氏は、日本人のパーソナリティの統一原理へ迫るために、二つの基本的概念を使用する。一つは自己否定性行動であり、他は自己肯定性行動である。前者の概念

は、日本人の伝統心理の基本的性格をなすもので、例えばコミュニケーションの場において、「話さなくてもわかる」とばかり、己を抑制し、しりぞけようとする傾向である。

伝統心理としての自己否定性は、人間対人間の関係に行する神対人間の関係での行動原則の残照、という仮説を提起する。この原則の典型例を、「まつり」に求め、祭事を研究することで、日本人の伝統心理の歴史・社会的性格を解明する。

この自己否定性行動は、無常性行動と無心性行動の二つの側面をもつ、と世良氏はいう。無常性とは、ある目的をなしとげるべく行動するとき、困難や障害にあうと、自己を否定し、他の行動者にバトンを託して行動の継続をはかろうとする傾向をいう。高名な謡曲の怨霊物である「道成寺」は、典型的な無常性行動を示したものである。

他方、無心性行動の典型は、地芝居・村芝居にみられる如く、演技者としての人形は、みずから行動の主人公たることを決して求めず、動かされるままに動くだけである。それ故、人形は自己を動かすものに運命をゆだねた無心性の具現者である。「祭礼における村芝居の奉納は、人間がその理想とする無心性の行動準則を、演技者や人形の行動

例に託して神に誓う意味をもっていた」と世良氏は考える。

では自己肯定性行動とは何か。自己が自己の行動において、主人公となり得る場合を指す。ここでは自己の目的や願望を、神や他者に託すことなく、全行動過程を自己の努力で成就することである。

今日の、若い日本人に、自己肯定性行動が急速に育ちつつあるが、厳密に言うくと、日本型自己肯定性行動と呼ぶべきものである。例えば「急ぐという習性」「ものの順序を踏まない傾向」にみられるような側面である。

欧米人にみられる自己肯定性行動の準則が真に形成されたとき、日本人の国際性が改めて評価されるであろう。本書は、日本人の主体性の確立とは何かを考察する上で、貴重な視点を提供した、勝れた文化心理学的日本人論である。

(宇都宮大学・心理学)

